

平成24年12月

年末年始も「孤立」を防ぐ多様なプログラムを

復興庁 ボランティア・公益的民間連携班
上席政策調査官
田村太郎

震災から2回目の年末年始が訪れようとしています。年末年始に向けて、被災された方々の支援にあたってはみなさんには、支援メニューをさらに多様にしていくことが大切になってきています。例えば、仮設住宅では、あちこちで「お茶会」などによる孤立を防ぐ活動が行われています。しかし、支援する人が固定化し、プログラムも出し尽くした感じがあるところも多いのではないのでしょうか。支援する側もされる側も、少し今までと違うこと、少し新しいことをどんどん試みていく必要があると思います。

去年と同じことを継続することにも価値がありますが、新しい工夫をすることで今まで参加してこなかった人たちにもしっかりとアプローチして、年末年始に被災者のみなさんが孤立しないようにすることがとても大事です。支援メニューを多様化するポイントは、視点を変えてみることです。例えば、対象を変えてみる。お茶会は、年配の女性が中心になりがちですが、どうやったら若い人や男性が参加したくなるか考えてみる。今まで女性向けにやっていたことを男性向けにやってみる、子ども向けにやっていたことをお年寄り向けにやってみるなど、少し視点を変えるだけで様々な発見があると思います。

必ずしも、まったく新しいプログラムを考える必要はありません。今までやっていたことを、場所や時間、曜日を変えてみたり、仮設住宅の訪問時間帯を変えてみる。そうすると、「あ、こんなところにこんな人がいたのか」と気づくことがあるはずです。朝、仮設住宅に行くと、犬の散歩をしている人に出会います。仮設住宅には昼間行くボランティア団体が多いですが、昼間は働きに出ている人も多く、あまり人がいないこともあります。朝や週末に行くと様子が違うし、逆に週末だけ行っていた人が平日に行くとまた違います。

これは、仮設住宅だけのことではないと思います。どんなまちでも、違う時間に歩いてみたら違う人に会えますし、違う風景が見えてきます。時間や曜日を変えてみるだけで、見え方が変わります。そういう発見をどんどん試みて、今まで出会わなかった人に会い、出てきてくれなかった人の課題にたくさん気づくと思います。

同じメニューでも違う人がやると新鮮味があります。例えば、今までは日本人がやっていたことを、外国人にやってもらう。そういう新しい取組を試みるということがとても大事です。今までまだ被災地に行っていない人や、対象としてこなかったグループに目を向けてみてはどうでしょうか。

仮設住宅というのは人が抜けていくコミュニティです。自立できる住民が徐々に抜けていく。これから先も仮設住宅でのコミュニティは縮小し、自治の担い手もどんどん変化していきます。人が減ることはあっても増えるということはないので、さみしくなってしまう。孤立の危険が高まります。自治会の会長を引き受けた人が一年経って仮設住宅を出てしまって、次の担い手がないというようなケースも出ています。このように、今後は、孤立の危険が高まっていきます。

半年前行ったときに大丈夫だった仮設住宅が、次に訪れると全然違う様子になっていることもあります。同じ場所を継続して見ていくと、状況の変化が見えてきます。それもとても大事なことです。これからに向けて、気持ちを新たに引き締めて、見守りを続けていくことが大切です。もういいだろう、ということはないのです。まだまだ先は長いです。

仮設住宅のコミュニティ作りに当たっては、「桃型よりぶどう型」を提案したいと考えています。これは、桃のような1つの固まりではなく、5～6世帯の小さな「実」がたくさん集まって、仮設住宅団地全体としては「ぶどうの房」のようになっている状態が、仮設住宅団地としては現実的ではないかと考えているためです。多くの人がどこかのグループに属していて、全体としてぶどうの房のようなかたちができているのが理想的ですが、1年以上が経過したいま、まだ孤立している人もいます。視点を変えて、これまでと違う確度から光を当てることで、見えていなかった部分がたくさん見えてきます。

年末年始は、一人でいると気持ちがさみしくなる時期です。年末年始に支援活動をするのはなかなか大変だと思いますが、今まであまり支援に参加してこなかった人にも、見て、感じてもらう機会があってほしい。そのためにも、年末年始に向けた多様なプログラム作りが大事だと思います。